

氏名： 菅野 健  
所属： 人間文化創成科学研究科文化科学系  
職名： 准教授  
学位： 文学修士 (1975 東京大学)  
専門分野： 独文学、特にトーマス・マンを中心とする 2 世紀独文学  
E-mail： kanno.ken@ocha.ac.jp

#### ◆研究キーワード / Keywords

ドイツ語／ドイツ文学／トーマス・マン／教養小説／精神史

#### ◆研究内容 / Research Pursuits

コア科目としてのドイツ語を、全学部の学生を対象として、いかに丁寧にかつ効率的に教えるか、ということが、専門のドイツ文学のコースがないお茶大においては（ドイツ語の専任は一人）、常に一方の研究課題にならざるをえません。お茶大生のために、長年の研究成果として『改訂・ドイツ語の文法』（22年、第三書房刊）を作成した後は、どこをどうすればさらによくなるかを考え続けています。

ドイツ文学の研究対象としては、ゲーテ、シラー、ショーペンハウアー、ヴァーグナー、ニーチェなどの影響を多大に受けた、2世紀最大の作家の一人トーマス・マンを主たる対象として考察を続けています。時代の精神状況がどこからどこへ、どのようにして流れて行くのか、それを偉大な精神がどのようにとらえて表現しようとするのか、ということ思索の原点にしています。

さらにこの大きな精神史の流れをとらえる一環として、このところかなり長期にわたって、『フィヒテ全集』の本邦初訳となる著作の翻訳に取り組み続けています。

## ◆教育内容 / Educational Pursuits

ドイツ語初級では、文教育学部の文 B というクラスと、理学部の理 A というクラスの、それぞれ「文法」と「演習」をペアで 2 コマ、計 4 コマ担当しました。週 2 回のリレー形式での授業なので、相当な実力がつき、その教育成果は、多数の独検合格者が出るという形でも現れました。

中級の 2 コマの一方のクラスでは、『こんにちは！ ドイツです』というテキストを用いて、ドイツ語を丁寧に読みながら、ドイツの現在のさまざまな事情を学びました。もう一方のクラスでは、『ドイツ・ことばと文化―やさしく読めるドイツ文化史―』を精読しつつ、ドイツの文化の流れを学び、ドイツ語の読解力を高めました。

上級、「独文学演習」（大学院は「近代独文学論」「近代独文学演習」）では、ヨハンナ・シュペーリの『ハイジ』を一字一句おろそかにしないで読みつつ、ドイツ語の力を伸ばし、ゲーテにつながる、ヨーロッパにおけるドイツ文学特有の教養小説のあり方について、考察を深めました。

## ◆研究計画

お茶大生のために長年の授業経験を生かして作成した教科書『改訂・ドイツ語の文法』を、さらによりよきものにしていきたいと考えています。

ドイツ文学の分野では、精神史の大きな流れ、ルター、レッシング、ゲーテ、シラー、ショーペンハウアー、ヴァーグナー、ニーチェ、そしてトーマス・マン（1875? 1955）に至る時代の背後に潜む精神状況を考察の対象にしています。人間の精神は、それぞれの時代に、どこから来てどこへ行こうとしていたのか。そして今、我々はどこに向かっているのか。

このような大きな精神史の流れをとらえる一環として、このところかなり長期にわたって、『フィヒテ全集』の本邦初訳となる多数の著作の翻訳に取り組んでいます。すでに一冊は刊行されましたが、さらに二冊刊行される予定です。

また一方で、現在のジェンダー研究に至る先駆的役割を果たしたとも言えるヴィルヘルム・フォン・フンボルトの、まさにジェンダー論の、これまた本邦初訳となる論文の翻訳にも取り組んでおり、発表する予定です。

## ◆メッセージ

残念ながら専門のコースはないのですが、ドイツ語・ドイツ文学を、広く豊かな世界観・人生観を得るべく学びたい人にこそ、ぜひ入学してもらいたいと思っています。

ドイツ語の論理的構造をしっかりと学んで行くことは、どのような学問分野を専攻するにせよ、その専攻分野の認識を深めることに役立って行く作業なのです。ドイツ語の基本構造を理解・分析する能力を高めて行くことは、それぞれの専門分野をより深く理解・分析する能力を高めることと、同時並行的に起こって行くことでしょう。

大学に入って、まさに生まれて初めてドイツ語を学び始めるということは、それまでは経験しえなかった新しい世界に触れることであり、その世界を果てしなく広げて行くことでもあるのです。

森鷗外のドイツ留学を挙げるまでもなく、明治以来日本は、ありとあらゆる分野で、ありとあらゆることを、ドイツから学んで来たのでした。そのような文化と文化の交流の歴史に、皆さんも加わってほしいのです。